

1992年ルイス・カーン日本展開催記念
懸賞論文コンクール 佳作入選

テーマ 私にとってのルイス・カーン

主催 ルイス・カーン日本展実行委員会・デルファイ研究所

選考委員 <本選考>香山壽夫[東京大学教授]、志水英樹[東京工業大学教授]

蓑原 敬[蓑原計画事務所]、金子悦雄[デルファイ研究所]

<予備選考>小林克弘[東京都立大学助教授]、新井千秋[新井千秋都市建築設計]

前田忠直[京都大学専任講師]、富山義人[東京大学助手]、(順不同)

副題 なし

坂田 泉<37歳>

「ル・コルビュジェとの違いをどう考えますか」。

インド、アーメバダドの空港の出発ロビーのベンチに腰かけながら、日本から来た一人の学生の無邪気な質問に、そのインド人建築家は誠実に答えてくれた。

少し間をおいて うまい比喻を思いつくために少し時間が必要だった 「コルビュジェは一步一步ジャイアントステップ大きく歩く。カーンは少しずつ、しかしまっすぐに歩いてゆく」。大きな身振りと、二本指の小さなジェスチュアで切りだした。「そして、建物をみてごらん。コルビュジェは大袈裟な HELLO! カーンは慎み深く、しかし親愛なる挨拶を送る。」インド人建築家は、右手を顔の横に小さく挙げて微笑んだ。

その前日、水蒸気をたっぷりと湛えた全天を真青に染めあげた大気の中で、小さな乗用車の窓越しに突然現われたインド経営大学のレンガ造の佇まいが脳裏に鮮やかに蘇る思いがした。彼のいうとおり、それは実に親密なる挨拶による出会いであった。

アーメバダドという街は、カーンとコルビュジェの両方が見られるという点で稀有な場所である。この地で出会った、実際にカーンの下でインド経営大学の設計に参画した経験をもつ一人のインド人建築家の言葉は、カーンとコルビュジェについての私の理解の基底をなすものとなった。コルビュジェの建築の背後には、コルビュジェ自身が堂々と立っている。モデュロールエスプリ・ヌーヴォーの概念を示すあの立身像のごとく大きく片手を挙げて、頑強な体躯を備えた新しい精神を宿した理想的な人間像としてそこに立つ。

しかし、カーンはどこにいるのだろう。インド経営大学の空間は極めて重層的だ。内外の区別は幾重にも重なる壁のつくる襞の連なりの中で、実に曖昧としていいる。個々の要素が自由な饗宴を奏でるコルビュジェの綿織物工業組合の空間は、カーンの深さをもたない。

インド人建築家が鋭く感受したコルビュジェの尊大さは、その建築に身を置く時、実際ストレートに感じられる。私たちはコルビュジェと向き合うのだ。向き

合うが、結局のところ彼の饗宴の観客に過ぎない。カーンは深くインヴァイトする。どこまでも深く。しかし、カーン自身は終に私たちに姿を見せない。彼のつくる翳に ^{スベント・ライト} その費やされた光に包まれるだけだ。

カーンと、そしてコルビュジェとの短い出会いから十数年 私は今、七色の泡沫の弾けた虚空を茫然と見上げる日本の建築界に、どっぷりと身を浸している。しかし、カーンの遺した言葉は、そんな鈍化した感受性にも鋭く響く力をもつ。TRUTHFUL ジョン・レノンの詞についてこういったアーティストがいたが、カーンの言葉にも同じことがいえる。

しばしば、カーンは難解だといわれる。これは、英語を母国語とする人からも聞いたことがある。「日本人はカーンを ^{アイカーン} ICON のように有難がるけれど、私にはわからない。」 LOUIS.I.KAHNと ^{アイコン} ICON、半ば洒落のつもりもあったようだが、彼女にとってもカーンの思惟はミスティックで、どちらかという東洋的なものに近いというつもりだったようだ。

たしかにカーンの言葉は、どこか ^{アンファミリア} 見知らぬところがある。普通名詞の a school は、カーンの語り口の中でいつしか冠詞を省かれ、非・可算化された大文字の SCHOOL になる。もともと形容詞の少ないスタイルの中で、そうした見知らぬ大文字の名辞がちりばめられたカーンの講演録などを見ていると、明晰に分節された ROOM の連なる彼の平面図を目のあたりにした時と同じ印象を受ける。それらの名辞は、日常の意味空間における使い古しの衣を剥奪され、意味生成の現場に立ち会うべき新たな力をチャージされた言葉だ。そうした言葉をもって、彼は例えば、「一本の樹の下でいまだ自らを教師と知らぬひとりの男が・・・」と、SCHOOL ということの始まりを語る。名前のない ROOM の連合としての PLAN と、見知らぬ大文字の名辞たちは、共に私たちに招き、そこで何事かの現成に立ち会うことを求めている。

カーンは、私たちに求めている。彼は、TEACH という言葉の通常の意味を解さなかった。ひとりひとりの学生をかけがえのない人間として彼らの前に立った。その時生まれる関係は、教える 教わるという単純な構造ではない。あくまでもかけがえのない人間同士の出会い そこに生ずる何事かが彼にとっての教育であった。

カーンが去って 18 年。カーンの声の記録に触れる時、この肉声を聴いた人たちが、今どうしているかと考える。彼は、いかなるドグマもイズムも教えなかった。自分自身になるということだけを その正しさと、その意欲を人の心に灯し続けた。だから、あれだけ長い教師としての活動にも関わらず、カーンを模倣する人が他の巨匠と較べる時、驚く程少ないのだろう。カーンの建築と言葉は、私たちに手を差し伸べている。共にそこに立ち会うことを強く求めている。そして、自分自身であることへの力を脈々と伝えている。